
零(れい)の少女

聖ら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零れいの少女

【Nコード】

N2776J

【作者名】

聖ら

【あらすじ】

なんで私を置いていつちやったの

幼い頃に両親をなくした姉妹。

残されたたった二人だけの家族を襲うさらなる悲劇。

妹の死

一人残された姉……零となり果ててしまった姉。

この孤独の中で、生きている意味はあるのか。

自らの命を捨てよう……そう思い始めていた時

「やつ、おねーちゃん久しぶり！元気してた？」

これは、誰の悪戯なのか……

運命に疑問を抱き続ける姉妹の物語

いつからだろう。

私という人格がおかしくなってしまったのは。

学校への出席日数、ほぼ零。

友達の数、ほぼ零。

他人と口をきいた数、ほぼ零。

家を出た数、ほぼ零。

生きている意味、ほぼ零……。

私は私そのものが、零という存在に成り果てていた。

零と一は全く違う。数の差で言えばたったの一かもしれない。だが、存在価値で見れば、零は無。一は有。

零はいくつ足し合わせても無であり続ける。対して一は集まれば集まるほど大きな存在になる。私の存在は間違いなく零。

私以外の人は皆一以上。私は無。いてもいなくても何も変わらない……。

冒頭で、いつからだろうなどという疑問を抱いてはみたが、実はその答えは明白だった。

何月何日の何時何分という単位で正確に言える自信がある。

六ヶ月前の四月十四日、二十三時三十四分。それは、私と妹の誕生日であり……私の、たった一人の家族が……妹が殺された日。

幼い頃に両親を亡くした私たち姉妹。私は出来る限り理想の姉でいたかったから、料理も勉強したし、家事も一通りこなせるようにした。

そして妹のほうも、そんな私に迷惑をかけまいと思ったのか、一生懸命料理を覚えて家事を覚えてくれた。

朝同じ時間に起きて、同じ時間に登校して。同じ時間に部活動を始め、同じ時間に帰宅して。同じ時間に晩御飯を食べて、同じ時間にお風呂に入って……。

そして同じ時間に寝る。

私達は“いつも一緒”だった。だって私達は家族だから。大切な…… たった一人の家族だから。

けれどももう、妹は……この世にいない。

通り魔だった。

「おねーちゃん。ちょっとコンビニ行ってくるねー」

この言葉が妹から聞くことの出来た、最後の言葉。

通りがかった近隣住民が救急車を呼んだ頃には、既に瀕死の状態だった。

「……………」

あの日から今日で丁度半年。

この半年、私は生きている自覚がほとんどない。だが今私は、空腹を感じている。どうやら、生きていたようだった。

時刻は二十三時三十分になるところ。ようするに、今から半年前のこの時間に。私の家族は……私の大好きだった妹は……。

「……………」

やめよう。これ以上自分を追い詰めることなんてない。これ以上追いつめたら私は間違いない……壊れてしまう。

「……おなか……すいた……………」

人間、生きていく限り、空腹、睡眠は欠かせないものとなる。それがたまたまなく嫌だった。何もしたくないというのに。

だったら生きるのをやめればいい。

どうやって？

そんなの簡単だ。自分で自分の命を

あの時から私は、こんなことばかり考えていた。考えているだけで一日が終わる。この半年で私がしたことなんてわずか一文で書き記すことが出来る。

人間のもつ三大欲求に基づいた行動と考えること。

余りにも素っ気なさすぎる。これじゃまるで腐った人間だ。この世の中には腐女子なんて言葉があるけど、私は文字通り腐女子なのだろう。

「……………」
時計を見れば二十三時三十四分。嫌な時間だ……………時すらも私をあざ笑うか。

「外……………いこつかな」
この時間を見てしまったからなのか……………。普段の私なら絶対にあり得ない提案。ただ今はなんとなくこの家にいたくなかった。

目的地は……………コンビニ。うちから徒歩で十分という距離にある場所。何日ぶりの外出だろう……………。

ちゃんとドアのノブを下げられるか心配である。まあ……………下げれたわけだけだ。

「寒……………」
それに……………暗い。

田舎故に深夜でも開いている店というものが無く、外灯の灯りだけが町を照らしていた。こんな所に通り魔……………現れる確率なんてほんの数パーセントだろう。

その数パーセントの犠牲者が妹なんて……………。なんて理不尽な世の中だろう。この瞬間、どうやら神は私を見捨てたらしい。

神に見捨てられた者の末路は零ということか。神は人を腐敗させる力を持っているらしい。

「はあ……………」
五分程度歩いただけで、早くもだるくなってきた。休憩がてら、立ち止まって夜空を見上げる。

妹は天国で……………私を見守っているのだろうか……………。それとも、こんな私に呆れているだろうか……………。

「……………さよ……………なんで私を置いていっちゃったの?……………」
沙夜。それが私の妹の名前。いつも一緒だった私たち。学年の関係で、校舎が違うのがお互いすごく嫌だった。双子が良かったと何度

思ったことか。

「さよ……」

今でもちゃんと思い出せる。沙夜の笑顔。沙夜の泣き顔。沙夜の怒った顔。

どれも魅力的で、私は大好きだった。私は沙夜の全てが大好きだったと自信を持っていえる。

と、そんな切ない感傷に浸っていた

瞬間

「っ！？」

ぼーっとしていた私の意識に走る電流。

突如後ろから何者かの手によって身体の自由が奪われ、同時に私の口にも手をあてられる。

声を封じられ、抵抗する手段がなくなってしまった私は、とにかく頑張つて腕の拘束から逃れようと試みしてみる。

……が、どうやら後ろの人物は私よりも体格が大きいようで、びくともしない。

手馴れた動きだった。ここまでの動きに一瞬たりとも無駄という要素が含まれていない。

もしかして……通り魔!?

(嘘でしょ……)

この時刻にこの場所で。これは何かの因縁なのか。私の家族は夜二十三時三十分以降にコンビニへ行くこうとすると、通り魔に会う遺伝子を継いでいるのかもしれない。

一時はパニックから思考がぐちゃぐちゃになっていたが……時間の経過と共に、私は意外な程に冷静さを取り戻していった。

私たち姉妹はいつも一緒。だったら、死に方も同じ……。零の私はいなくなっても何も変わらない。

唯一の親族だった祖父母も、もうとっくに他界してしまった。だが

ら、よく考えれば私の死を悲しむ者なんて誰もいないんだ……。

(今……そっちに行くからね……沙夜……)
私を拘束していた何者かの手が動く。おそらく何か凶器を取り出して、わたしを殺すのだろう。

覚悟は出来ている。もう抵抗する気なんてまったくない。私は目を瞑って次に来るだろう痛みを覚悟した。

だが、覚悟していた痛みは一向に私を襲ってこない。それどころか、手がゆっくりと私の身体を……わき腹を這ってくる。

(え……ええっ!?!? こ、これって……)

私だって女だ。この状況が何を意味しているか、そして私がこれから何をされるかくらい本能的に察知できてしまった。

後ろから伸びてきた手は、服の合間をぬって直接私のわき腹を弄る。ああ……やっぱり。私はこれから……。

抵抗の出来ないのいいことに、手の動きはどんどんエスカレートしていく。気付けば私は下着のホックを外されていた。

そういえば……沙夜とよくジャレ合いつこしてるときも、よくこっやって私の身体にくっついてきたっけ……。

そして決まって沙夜はこう言うのだ。あはは。おねーちゃん胸ちっちや〜い、と。

「あはは。おねーちゃん胸ちっちや〜い」

そう。こんな感じで。発音、発声、共にパーフェクトな沙夜っぷりである。

というか……沙夜そのものだった。

……

「!?!?」

って何今の!?!?沙夜?沙夜なの???でもそんなはずは……じゃあこの後ろで私を拘束しながら直接胸を触っている奴は何者!?!?

やっぱり通り魔?にしてはさっきのは沙夜すぎる。それによく見れ

ば、勝手に通り魔は男だと決め付けていたけど、この白くて細い手……男のものには到底見えない。ていうか声、高かったし。それに背中に柔らかいものがあたってるし！私より大きいし！！

「んー！んーっ！」

とにかく後ろの者の正体を知りたかった私は、全身全霊の力を持って暴れた。

「うわっ」

相手も今まで大人しかった私の突如の抵抗に反応出来なかったらしく、拘束が解けた。

そして私が目にした通り魔の正体。それはやはり、と言えばやはりなのだが、同時に、何で、嘘でしょ、あり得ないという驚愕がごちゃ混ぜになった感情が私を支配した。

「やっ、おねーちゃん久しぶり！元気してた？」

私が見間違うなんてはずはない。その正体は、確実に……沙夜だった。それだけで我を忘れる理由など十分。勝手に体が動き出す。

「さよおおっ！！」

「おねーちゃんああん！！」

私達は、外灯のスポットライトに照らされながら、深く……深く、抱き合った。

昨日の晩御飯、カップラーメン。一昨日の晩御飯、カップラーメン。一週間の間に食べた晩御飯の種類、一種類。

内容、カップラーメン。今日の晩御飯、沙夜の手作りカレーライス。

「……………」

感動で、涙が溢れた。おいしい。おいしすぎる。これが沙夜の味……。

「おいしい？」

「うん……。でもね……………」

「あれ？もしかしてお水多すぎちゃった？……」

沙夜は……もう死んだはずなんだ。その沙夜が私の目の前で……手の届くところでカレーライスを食べている。

あれだけでもう一度沙夜に会いたがっていた私。その願いが叶ったというのに……いざ叶ってしまったとひどく……不気味だった。

この世にいるはずのない“もの”が、“者”として存在している。嬉しいのは確かだけど、この事実のせいで素直に喜べないでいた。

「沙夜さ……死んだ……はずだよ……」

遠まわしに言う必要などないと判断した私は、単刀直入に、そして唐突に核心を聞いた。

「今の、でもさ、っていうのが文脈に合っていないよ……えっと、うん……」

いまいち煮え切らない表情で沙夜が頷く。さらに沙夜は続けた。

「でもそのせいでお姉ちゃん……変わっちゃったよね……」

たしかに私は変わってしまった。家族を失った絶望。

その絶望感は生半可なものではなく、私の気力というものを根こそぎ奪い去っていった。動く気力。生きる気力。全てが零になった。

「だから私はそんなおねーちゃんを更生させるために、現世に留まっっているというわけです！理解した？」

できんわ……。そんなことが本当にあるのだろうか。でも確かに、私を更生させるために幽霊になって現れた、と言ってしまったえば、今のこの状況を完璧に説明出来る。論より証拠。実物を見せ付けられれば、疑いようがない。これは信じるしか……。

「と、言うわけで、明日からおねーちゃん更生計画を始めるよ！今日はもう遅いからお休みということ。あ、洗い物は私がやるからおねーちゃん先に寝てていいよー」

私と自分の食器をシンクへと運び、それから食器を洗う音が聞こえる。何もかもが……沙夜だった。

体格は勿論、その手の動かし方や話し方まで。先ほど脱ぎ捨てたパジャマを再び手に取りながら、考える。

これは今日眠れそうにない……。ただ、いつもと違う。決して私にとって、悪いとは言わない考えについてを考えることが出来るというのが、少し嬉しくはあった。

やはりというべきか……結局ほとんど眠りにつけなかった。

明け方まで沙夜のことを考えた。もう頭の中がいつも以上に沙夜でいっぱい。それでも、六時ちょっと前ころには瞼が重くなってきて眠りにつけたようだが、七時になった途端、「おつきねー！」という大声によつて睡眠が妨害された。私に一時の安らぎを……。

「なにすんのさ……こんな朝早くに起きて……」

ベットの上にペタンと座った状態で思わず欠伸をしてしまう。って、もう沙夜私服だし。

「まずはこの家の片付け。もうこの家の有様を見ただけでおねーちゃんがどんな生活してきたかわかるよ……」

はあ、とため息。家のあちこちに主にコンビニの戦利品が捨てられている。

一応、ビニール袋に纏めておいたつもりなのだが、よく見渡してみると相当汚い。これを全部片付けなきゃいけないのか……。

だるい……

というのは昨日までの私。けど今はそんなこと思わない。なぜなら……
沙夜が帰ってきてくれた。

そしてこれは私が一晩考えて出した結論。もうこの際幽霊だとかそんなのは気にしない。だって沙夜は沙夜なんだから。

またこうやって、沙夜と話しが出来るというだけで私は十分に満たされる。まったく……私は沙夜をどれだけ愛してしまっているのか。

「はいはい……」

ベットからもぞもぞと起き上がった私は、ひとまず着替えることにした。見れば沙夜はさっそく掃除を始めているようで、大きなゴミ袋に、床に散乱した物を片っ端から放り込んでいる。となると私は朝食の準備に取り掛かるのが良いかな。パジャマを脱ぎ捨てて、タンスの中に納まっっている適当な服を出す。

どうせ外出なんてしないから、ラフな格好でいい。

「あれ？おねーちゃんって寝る時ブラつけてなかったっけ？」

下着をゴソゴソと漁っている私を見た沙夜がそんなことを聞く。

「だって邪魔じゃん」

「え……つけてないほうが邪魔なんじゃないの？」

……。なんでこの妹は私よりも体格がいいんだ。同じものを食べて同じように運動して育ってきたじゃないか。なぜここで私を裏切るのだ沙夜……。

「人間はね、本来裸で寝るものなんだよ」

苦しい発言である。とりあえず沙夜の視線を浴び続けていると思うと変な気持ちになってくるので、早々に着替えることにした。

「へー。じゃあ今度裸で寝てみようかな」

「うん、そうしなさい」

寝てる間にカエルでも入れてやる。とか考えてた私にここで天罰到来！

「あれ？ なんだろこの丸まったティッシュ……。何か入ってるのかな？」

「いやあああああつ！！」

私の速度は光をも超えた！沙夜の手元に収まって、今にも中身を覗かれようとしていた一つの丸まったティッシュを光速で奪い取る。

そして即座に燃やす。燃えろっ……燃えろっつ！！

「え、ええ！？ 何ライターなんか使ってるの！？」

我が手中心にて灰と化したティッシュ。ティッシュ相手に本気を出すことになるとは……。

「何も入ってないわよ。朝食は昨日の残りでいいよね」

「う、うん……」

今見た物は忘れる。という強力な意思をぶつけてやった。魔眼である。

「ほら、ひとまずご飯にしようよ。食べ終わったら私もやるから……」

「ん、そだね。そにしても、これ片付けるの今日丸一日使っちゃいそう……」

沙夜が手を休めて私の向かい側のテーブルの席に腰を下ろした。沙夜との半年ぶりの朝食。

沙夜がいるだけで……私はすっかりあの日以来の私に戻れているような気がする。沙夜は私を更生するために現れたという。

この分なら、沙夜がその目的を達成するのは良い意味で時間の問題だろう。だが……その願いが叶った場合、沙夜はどうなるのか。

一般的な考えでいうと、この世に未練を残した霊はその未練を成し遂げることによって、成仏していくといわれる。

この場合沙夜の未練というのは、間違いなく私のことだろう。そしてもし私がこのまま更生してしまったら沙夜は……成仏してしまうかもしれない。

私の前からいなくなってしまう。また私は一人になってしまう。今の私は沙夜という存在がいるからこそ、このように更生の道を辿っているのは明らか。

今の私から沙夜がいなくなってしまうたら……。そんなこと考えたくない。せつかく私の元に戻ってきてくれたんだ。

もう絶対に沙夜と離れるなんて嫌。絶対に……。

私たちは……いつも一緒なんだから……

沙夜の言った通り、私の家を片付けるといふ作業は、ほぼ丸一日かかった。

こんなに動いたのは久々すぎる。あちこちが痛い。私は精神が腐っている間、身体のほうも腐っていたようである。

それにしても……半年前までは当たり前前の光景だったのに、改めて今私の家を見渡すと、ここは何処ですか？という気になってくる。それほどまでに、綺麗だった。その理由は、ゴミを片付けた後に、雑巾がけ、掃除機、と一通りを行ったためである。

私たちは二人とも家事を心得ているので、スムーズに進めることが出来たというのもあるか。

「つ、つかれた……」
思わずソファーにうつぶせに倒れこむ。

「お疲れ様。うんうん。これこそ我が家のあるべき姿だね」

といいながら、わざわざソファーの空いている場所ではなく、倒れた私の上に座ってくる。

「ぐげえっ！」

軋んだ。今ギシツとか言ったけどたぶんそれソファーじゃない。私の骨の骨。

「あ、ごめん。重かった？……」

あわてて腰を上げる沙夜。今の私にとっては重い……重すぎた……。おかげでカエルが苦惱しているような声が出てしまった……恥ずかしい。

「い、いや……だいじょーぶ」

もう今日は早く寝たい。このまま寝てしまいたいところであるが、今日は一日中掃除をしていたのだ……。お風呂に入らないのはさすがに不味い。

体が埃っぽいことが自覚できる……。

「お風呂入らなきゃ……」

「って言うと思って、実はさっきもうお湯いれといたんだ」

「ほんと？ありがとー……」

「じゃ、おねーちゃん一緒に入るっか」

「…え」

沙夜と入浴。それは決して珍しいことではなかったし、それこそ恥ずかしがるような関係でもない。

だが、それはあの日より前の話。あの日を境に私は変わってしまった。それは気力関係のことだけではなく、沙夜に対する愛というのも変化していた。

沙夜のいない世界が色あせて見えるなら、せめて頭の中に沙夜を投影すればいい。

そうしているうちに、私はいろんな意味で、沙夜なしでは生きていけない身体になっていた。

「……」

見れば、沙夜はタオルやら洗顔セットやら二人分を用意し始めていた。

「じゃ、いー」

「んー」

ま、沙夜と一緒に風呂に入るっていうのもすごく久しぶりだし、いつか。

きつと楽しいに違いない

なんて思っていた時期が、私にもありました。

「っ〜」

まさかこれほどまで私は変わってしまったとは。沙夜の身体が直視できなかつた。全然楽しめないっ！

うちの浴槽はそこまで広いというわけではないが、女の身体二人が入るくらいのスペースはある。

だから、そこまで密着状態になるという展開にはならないのだが…。

「じゃ、おねーちゃん。背中洗ったげる」

硬直状態となった私の気なぞいざ知らず……沙夜は泡を立てたスポンジを私の背中に押し付けて、コシコシと洗い始める。

「……」

むう……意外と気持ちいい。他人にコシコシされるのはやはり一味違う。なんだかこのままだと眠くなってしまいそうだ。

と、なんとなく正面の鏡に映った私と沙夜を見る。やっぱり沙夜は大きい。これじゃあ私が妹みたいだ。

ちなみに、私と沙夜は共に腰付近まで伸びたロングヘア。毎日の手入れがすごく面倒くさいが、お互いがお互いに、似合ってる、と言ったため、それ以来ずっとこの髪型だ。普段沙夜はポニーテールで私はツインテール。でも、こうやってお風呂場に来て髪を下ろすと、お互い同じ髪型になる。一緒、である。

「はい、終わったよー」

シャワーを使って背中についた泡を落としていく沙夜。ついでに沙夜の指が私の背中を滑る。

「……」

「ふんふん」

肌理細やかな沙夜の指が私のわき腹に触れる度に、身体がピクンと跳ねてしまった。

「あれ？くすぐったかった？」

あ、当たり前でしょっ！

と、言いたかったが、今喋ると声が裏返る事確定だったので、無言を通す。

「えへへ。じゃ、次前洗うねー」

「んえっ！？ ま、前は自分でやるから」

とか超反応を示したのに、沙夜はあろうことが両手をわき腹から思いつきり差し入れて私の前面で交差させ始める。丁度沙夜に抱きしめられている体勢だ。

「」

思考が……停止する

「おねーちゃん……私、ずっと会いたかったんだよ……」

「さ……よ……」

反則だ。この状況でそんなことを言うなんて……そしてゆっくり……沙夜が動き始めた。

前面で交差させた手により強く力を込めて……私たちの身体が零で密着する。

「会いたくて、会いたくて、会いたくて……何度も何度もおねーちゃんのこと思い浮かべてた」

背後から私の首筋に顔を埋めてきた沙夜。そのままスーと大きく息を吸い込んだのが聞こえた。沙夜の呼吸が……零距离で私の感覚を刺激する。

「おねーちゃんの顔……身体……柔らかさ……匂い……」

そのまま沙夜は顔を移動させながら……私の唇に自分の唇を重ねようとして

「……す、すとーっぷ……」

「ひゃっ!?!」

カッ!と全身から何か気のようなものを発して沙夜を跳ね飛ばした。喝ッ!!

「お、おねーちゃん……なんで……」

と、見れば……沙夜はすごく悲しそうな顔をこちらに向けていた。

そんな顔をしないで沙夜……。私だって……その、こうしたい気持ちにはなかつたわけじゃない。けど、これは……超えてはいけない一線だ。今の私だってそれくらいわかる。

「あのね、沙夜。私たちは姉妹なの。ああいうことはしちゃだめ!」
姉の威厳もたまには見せ付けてやらないといけない。

「……っ、うん……そうだよな……。ごめんね……。私、どうかしてた……」

沙夜は意外にもあっさりと自分の非を認めてくれた。

「で、でもね……さっき言ったこと……嘘じゃ、ないんだよ?ほん

とに、おねーちゃんに会いたくて私おかしくなりそうだったの」

「そんなの……私だって同じに決まってるでしょ沙夜。私たちは家族なんだから……」

不思議と。私はあれほどさつき出来ずにいた、沙夜の身体を直視するということに、何の抵抗も感じなくなっていた。

「ほら、さつさと身体洗って出ましょ。晩御飯は私が作るから」

「……うん」

また一つ……どうやら私は沙夜によって更生されたようだった。

浴室での宣言通り、今日は私が料理を担当……であったのだが、テレビを見ていた沙夜が、途中から飽きて私を手伝いに来たため、結果として二人で作ることになった。

そんな夕食で、沙夜が私に告げたことは、このようなこと。

明日から学校に通おう

これを聞いた時、まあ流れる的に言ったらこうなるだろうな、ということくらいは予想していたので、大して驚きはしなかった。

学校に行っても友達など私には当然一人もいなかったが、そんなこと重要ではない。

沙夜さえいてくれれば私は……生きていけるんだから

そして次の日から、私の新しい日々が始まった。

沙夜も自ら学校に通うと言い出して、私と一緒に登校することになった。通学の途中でお互い別れなければならぬのがどうしようも

なく辛い。

そして復学を果たした私は、一週間くらいで友達というものが出来た。通う前は必要ない、出来るはずない、と思っていたが、案外なんとかなってしまふものなんだと思う。

男子生徒にも告白された。その時私は「あなたに興味ありません」と即答。その後、私は男に興味がないとか、私はレスだ。とか訳の分からない噂が飛び交った。意外と的を射ている所が怖い。そのことを沙夜に話したら、なんと沙夜も男子生徒に告白されていて、「あなたに興味がない」と答えたらしい。

冬休みは毎日二人きりで過ごした。

クリスマスもお正月も、ずっと二人で……。お揃いのマフラーをお互いにプレゼントして、お互いありがとうと笑い合った。

そして、沙夜が受験に合格した。受験した高校は勿論私と同じ高校。

沙夜は昔から勉強があまり得意ではなかったけれど、一生懸命勉強して、私と同じ高校に合格できた。合格発表の日、私は喜びすぎて腰が抜けてしまい、沙夜に抱きかかえられて帰路についたのは恥ずかしかったけど嬉しかった。

そして……あの日から丁度一年が経過した。

四月十四日……私たちにとっての運命の日……忘れたくても忘れられない日。

そして私たち姉妹の誕生日。丁度私が生まれて一年後に生まれた沙夜。私たちは同じ日に一年を取る。

“私たちは、いつも一緒だから”

沙夜にとって誕生日は、イコール命日。そして私にとっても、ある意味イコールで命日だった。何せ、かつての私という人格が死んでしまったのだから。

「沙夜……誕生日おめでとう」

「おねーちゃんも……誕生日おめでとう」

夜空の下……私たちは今ベランダに出て空を見上げていた。もうすぐ春も終わり、これからは梅雨に向かっていくところ。

夜も大分暖かくなってきたように感じる。

時刻は丁度、二十三時三十分を過ぎようとしているところだった。

「静かな夜だね……おねーちゃん」

「うん……」

「……あの時もね……すごく静かだった……」

「っ！」

今日という一日、お互い意識していたものの、あえて触れないでいたあの時の事……。それを何で今になって……。同時にこみ上げてくる悪寒。嫌悪感。

「さ、沙夜……その話は……」

これ以上は聞きたくない。沙夜は沙夜。いつだって私の傍にいる存在。

それ以上ではあっても、それ以下であってはいけない。だからもう何も言う必要なんてない。

「おねーちゃん……私は」

「嫌っ！！」

沙夜がこれから何を言おうとしているのか……私には想像がついてしまった。その理由は、沙夜の表情。

今までに見たことがないくらい穏やかな優しい表情。そう、それはまるで……

もうこの世には未練がないような

「……。おねーちゃん……」

「嫌っ！……嫌々っ！！沙夜、私たちはずっと一緒でしょ……」

沙夜に次の言葉を発することを許さなかった。その先の言葉を聞い

て、冷静でいられる自信がないから。

私はもう沙夜なしでなんて生きていられないから……。

「高校だつて合格したじゃない……これからは同じ高校に通えるんだよ？毎日……毎日、毎日一緒に登校できるんだよ？」

「でも……もう、終わりにしようおねーちゃん……終わりにしなくちゃ、だめだよ……」

沙夜はゆっくりと……この静寂の中、私に何よりも辛い申告をした。
「ッ　　!?」

……やめて……そんなこと、言わないで……。

「これが私のおねーちゃん更生計画の最後の項目だよ……」

何……何を言ってるの沙夜。最後？最後つて何？……

「その内容は……」

無理よ……そんなの無理に決まってるでしょ。だめ……もう嫌。言わないで。あなたの口からそんな言葉聞きたくない。私にそんなひどいを事をしないで！

「私なしで……」

だめっ……だめ。その先はだめ！だめだめだめだめだめイ
ヤダイヤダイヤダイヤダイキキタクナイキキタクナイキキタク
ナイ

「これから生きていくこと」

ワタシヲ、ゼツボウガ、シンシヨク、シテイク

「いやああああああああ　　!!!!」

「お、おねーちゃんっ!？」

世界が私を中心に反転したような錯覚に陥った強烈な悪寒。この悪寒に耐え切れなかった私は、本能的に奇怪な叫び声をあげていた。

サヨガイナクナル？ナニヨソレ、ナンナノ？カンガエラレナイ。サ
ヨナシデイキテイク？サヨハ、マタワタシヲ、ヒトリニ、スルノ？

沙夜がいなくなってしまうということ、そしてまたあの私が腐りきっていた日々が訪れること。そのどちらも恐ろしくて堪らなかった。「おねーちゃんはもう一人でやっていける……友達だって出来た。それにちゃんと学校にも行けるようになった」

まともに立っていられない。吐き気がこみ上げてくる。沙夜が何か言ってる。聞こえない。全身から嫌な汗が吹き出る。

沙夜……私を抱きしめて……私を支えて。私は沙夜なしじゃ生きていけないってこと、ちゃんとわかって。

でも沙夜は……私を抱きしめてくれない。

……どうして？どうして沙夜は私に手を貸してくれないの？倒れそうになっっている私を支えてくれないの？こんなに辛いのに。

そっか……沙夜は大きいから……ちょっと屈まなくちゃいけないんだね。

だったら私が手を伸ばせばいいんだ……そうすれば、沙夜はいつもみたいに、私に手を差し伸べてくれる。

「おねーちゃんはもう一人で……一人でやっていけるよ……」
沙夜は……

私に手を差し伸べようとはしなかった。

私を襲う、莫大な絶望感。

あの日、あの時以来半年に渡って私を支配し続けていた絶望感。その絶望感が再び私に襲い掛かった。

沙夜は私に手を差し伸べようとしなかった。あれほど愛し合っていた沙夜が私を見捨てるなんてことはあり得ない。

だから、ここにいる……この目の前にいる“沙夜の形をした女”は沙夜じゃない。

そう、だって沙夜はもう死んでるんだもの。ここに居る訳ないじゃない。

この沙夜の形をした者が現れてからの約半年の間、私は本当に幸せだった。逆に、沙夜のいなかった半年は死んでいた。

沙夜がいるのといないのでは、私にはこれほどの差があるんだ。じやあ私の正しい人生って何？それは沙夜がいて、私がいること。

だから、あの半年間は私は私の人生の中にいなかった。あれは“私の人生じゃない。じゃああれは誰の人生だったのか。

それは、“沙夜のいない私の人生”だ。これは、私とは別物。私とというのは、すなわち沙夜が傍に居ること。

私たちはいつも一緒

そう、私たちは常に一緒に居なければならぬ。一緒に居なければ、私たちは成立しない。

なんだ……そういうことだったのか。つまり、沙夜がいなくなったあの日から……私の人生はもう終わってたんだ。

あの幸せな半年間も、偽りにすぎないんだ。その証拠に、こうやって終わりがやってくる。偽りには必ず終わりがある。

偽りに終わりが無いのだとしたら、それは偽りではなく、真実になっってしまうからだ。偽りという言葉を使う限りは、必ず終わりがあ

る。そして、その沙夜のいない私の人生の終わりが、今まさにこの時訪れようとしている。

もう、疲れた……。私じゃない人の……他人の人生なんて興味ない。私は私の人生を生きたい……。沙夜と……沙夜と一緒に……自分の

……人生を

そしてこの瞬間に、私は……

「……」

「……え？お、おねーちゃん？」

“目の前の女”が見えなくなった。

「さよ……」

沙夜はとづくに成仏していたんだ。この女は、きっと私の態度に見かねた天国の沙夜が私に見せてくれた幻。

最初からいなかったんだ。私の人生は……沙夜と一緒に。沙夜と一緒にじゃないと“いけない”。

「もう……さよつたら……わたしをおいて、どこいくのよ……」

「え……お、おねーちゃん……急にどうしたの……」

ちゃんと外出する時は声をかけてほしい。そうやっていつも沙夜は心配ばっかかけて……。

「今から私も行くからね」

「ねえ……ねえつてば！おねーちゃん！」

私の見えないところで、何か事件に巻き込まれてでもしていたら大変だ。まあ沙夜は体格も大きいし“強い”から、そこらへんの奴には負けないかもね。

えっと……沙夜はどこへ行ったのかな。きっと“あそこ”だろう。

だったら近道をしていこう。“あそこ”に行くには、ここは“マンションの七階だから”結構早くいける。もうすぐ会えるよ……見つけたらまず何て言おうかな。後ろからいきなり声をかけてびっくりさせてやってもいいかな。

「ちよつとおねーちゃん……何、してんの……やめてっ！やめてってば！」

なんだろう……急に身体が重くなった。何かに引っ張られてる感じ……まあいつか。こんなの力を振り絞れば簡単に動けるさ。私の人生の邪魔をするな。

さて、それじゃあ出発だ。

“思い残したことはないか？”

ないよ。まったく。

よし、準備完了。それじゃ、いってきます

「さやあああああああああ　　！！！！」

とある民家で。

食卓のテーブルを家族四人が囲んでいる。夕飯。一家団欒の時間。
「先日、　　県、　　市のマンションで、少女の遺体が発見されました。死後の状態が、極めて悲惨であり、現場の映像をお送りすることは出来ませんが、警察の調べによると、飛び降り自殺であるとのことです。その原因を調査した警察は、今朝マンションの七〇四号室より発見された一人の少女に何か関係があると見て、捜査を進めています。この少女は、一年前におきた、“連続通り魔事件の犯人を殺害した”少女に極めて類似しており、その方向の捜査も同時に進行中とのことですよ」

「このねーちゃん悪い人を殺したの？」

「連続通り魔事件……。田舎の町を中心に、深夜に立て続けに起こった通り魔事件のことさ。その犯人は、犯行を犯そうとしたところでその被害者に逆に返り討ちにされて……。死んでしまったんだよ」

「ああ……。あつたなそういえば。けどさ、たしかそれって正当防衛の際に起きた事故ってことで処理されてなかった？」

「そうだな。確か“半年くらい刑務所で尋問を受けていた”が……

無実になったそうだし」

「と……今新しいニュースが入りました。この少女はやはり一年前事件に関わっていた少女であったとのこと。しかし、本人はとうやら精神が破綻してしまっているようで、口も聞けない状態である模様。このまま放置状態にしておく、自殺してしまう可能性もあるということ、警察側がしばらくの間保護するとの見解を発表しました」

私が、おねーちゃんを殺した

私が、死んでいて幽霊になったフリをしていたから

おねーちゃんは、幽霊になった私をこのままじゃいけないって思っ
て、きつと私のために更生してくれって思った。

そして、私をもつと愛してくれるようになると思った。そしてそれは果たされた。けど、私がおねーちゃんの前からいなくなる。

それを言った途端におねーちゃんは壊れてしまった。それは私への愛情の大きさを誇張するものであったかもしれないけど。

最初から私は死んでなんていないって言っただけで、きつとこんなことにはならなかった。

全て計算通りだった

私を通り魔に襲われたという事実を知らば、おねーちゃんは勝手に私が死んだものだと思ひ込む。その事の真相なんて知りたくないと思う。

私の大嫌いなおねーちゃんを殺す事が出来た

小さい頃から……ずっとずっとずっとおねーちゃんばかり。全てに

おいて私より優秀なおねーちゃんは、両親や祖父母に褒められてばかり。
ただ私がおねーちゃんより良いことなんて、大きいことだけ。
それが悔しくて悔しくて……憎くて憎くて

沙弥ちゃんはお利口だね

沙弥ちゃんは頭がいいね

どいつもこいつも沙弥ちゃんさやちゃん ツー！

私はいつもそこにいるだけ。おねーちゃんがほめられているのを見てるだけ。

私も褒められたい……

こいつさえいなければ……

そして終いには通り魔に襲われる始末。

なぜ……なぜ私ばかりがこんな目に会わなければならぬ！
けど、もうそんなこと考えなくていい。

沙弥はもう死んだ……私が殺した……。これからはずっと褒めても
らえるのは私だ

そんな、狂気の結末

私はもう何日もご飯を食べていない。病院の人が私を心配してくる。

「沙夜ちゃん……お願いだからご飯だけでも食べて……ね？」
「……」

うるさい……私が望んでいることはそんなことじゃない……。

褒めて……私を褒めて

けど、私を褒めてくれる人は誰もいなかった。
なんで……もうアイツはいないんだよ？ だったら褒められるのは私
じゃないの？……

私の月日は流れていく。

病院のベッドの上で

誰にも褒められることなどなく。

私は間違っていたのか。

そんなことをふと考えた。

けどその気力もすぐに失せてしまう……。今の私は、もう考えるこ
とも、言葉を発することも出来なくなっている。

ネエ……ワタシヲホメテ……

そして私は、遺体で発見される。病院のベッドの上で、私は死んで
いた。涙を流して。

その日付は、四月十四日。私と……おねーちゃんの誕生日だった。

(後書き)

この少女達は幸せだったのか。

と聞かれれば、おそらく二人はこう答えるだろう。

「うん、幸せだったよ」

方や愛する妹と再び過ごせた幸せ。

方や自分の目的を成し遂げることができた幸せ。

人の“幸せ”というのはそれぞれ違うもの。

くだらないことにみえたって、その人には幸せなのかもしれない。

自分にとっての幸せはなんなのか。

そのあり方を見つけられれば、その人生はきっと幸せなのだろう…

…。

最後に……当作品に目を通してくださって、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2776j/>

零（れい）の少女

2011年1月26日00時56分発行